

## 答辞

城間 周

本日はお足元の悪い中、私たち高校三年生の卒業式にお集まりいただき、ありがとうございます。卒業式という新しい門出の祝いの場ではありますが、六年間慣れ親しんだこの逗子開成を離れることに、今日を限りに制服を着ることもないということに、寂しさを覚えずにはられません。

六年前、逗子開成に入学した日のこと。様々な先生方の授業。その授業中に何度も寝落ちしてしまったこと。休み時間に友人たちと交わした雑談。そのすべてが鮮明に思い出され、懐かしく感じられます。

晴れがましさと寂しさのないまぜになった、そんな複雑な気持ちです。

この度、卒業生を代表しての答辞という大役を任せていただくにあたって、この六年間で自分の得たものを考えてみました。もちろん、いろいろな教科の知識であったり、技術であったり。あるいは集団生活のルールであったり、人としてのマナーであったり。

でも、自分の過ごした六年間を振り返ると、一番大切な発見がありました。それは、自分を、周囲の人々を、そして仲間を信じる心です。

まず何と言っても、中学三年生の時の遠泳。僕は小さい頃から、水泳が致命的に苦手でした。小学生の時、あまりのカナヅチっぷりを見かねた親に、一年間スイミングスクールに通わせてもらいました。まる一年練習したのに、25m 泳ぎ切ることすら、結局できませんでした。そんな僕ですから、水泳補習にも当然ひっかかり、指名補習者の中でも一番泳げないグループでした。中学一・二年生の頃は、遠泳なんて自分には絶対無理だと思っていました。でも、三年生になって、クラス全体で練習している中で、「みんなと一緒に遠泳を泳ぎ切りたい」という気持ちがどんどん強くなってきました。遠泳当日には、「まあ何とかなる！」と思えるようになっていて、待機時間中、余裕の心で友達と砂遊びをしていました。いざ泳ぐと、やはり辛いものがありました。しかし、体育科の先生の掛け声に応えると、自然と力が湧いてきました。そして結局、無事に泳ぎ切ることができました。今でも泳ぎは苦手です。平泳ぎやクロールはまだしも、僕にとっては、何もせずに水に浮かぶことを前提と

する背泳ぎが不思議でなりません。それでも、あの日泳ぎ切ったことは、自分の中で確かな自信になっています。そして同時に、あの日泳ぎ切れたのは、みんなと一緒に泳いだからだと思います。

あるいは、例えば開成祭や体育祭で、仲間の力、仲間がいることで生まれる自分の力を感じる事が数多くありました。体育祭では、団体競技の守備をやるが多かったのですが、攻撃側に破られてばかりでした。でも、自分が破られてもチームはまだ破られていなくて、まだ仲間が守備を頑張っている。校庭の反対側では、チームの攻撃陣が全力で相手を破ろうとしている。そんな光景を見ると、自分にもやる気が戻ってくる。

高校三年生の時には、担任の先生の指名で応援団になりました。初めてで分からない事ばかりだったけれど、同学年に、また後輩に頼れる存在があって、何とか活動できました。そして団の仲間のために、軍の仲間のために頑張りたいと思えました。団員みんなでの必死の練習の結果、最高の応援ができたと思います。

また、開成祭では、部活と有志団体の両方に所属して、両方でそれなりに責任ある立場を任せられていました。しかし、自分の至らなさから、数多くの迷惑をかけてしまいました。そんな時、顧問の先生や頼れる仲間、また部活では頼れる後輩が、どんどん素晴らしい企画を作り上げていてくれました。そしてその力に応えようと、僕も企画成功の力になれたと思います。

こうして振り返ると、仲間を持つこととは、責任を持つことなのかもしれません。でも、その責任の重さは、心地よい重さです。自分の無力さにつまづきかけた時に、頑張っている仲間の姿を見る。その姿に、「まだ頑張らなければ」という責任感が湧いてきて、「まだ頑張れる」という力が生まれる。その結果、仲間を信じる心、自分を信じる心が強まる。そんなサイクルにずっと助けられてきました。

高校三年生になり、受験勉強が本格的になっても同じでした。みんながいるから頑張れる。勉強も息抜きも一緒にしながら、少しずつ前に進める。逗子開成の先生方と大切な仲間、そして見守ってくれる家族がいるから、苦しいはずの受験勉強も楽しくできて、何とか最後まで走り抜けることができました。

本当に、周りに助けられた、周りに生かされた六年間だったと思います。

小学生の頃、僕は大人びた子供でした。本の虫だったせいも、自分の力を恃みにして、他人を信頼することを知らない、でも自分では何も決められない、そんな大人ぶった子供でした。けれど、逗子開成で過ごすうちに、少しずつ変わっていきました。自分の無力さを認めることができる。でも、無力な自分の周りに頼れる先生が、家族が、仲間がいるから、自信を持って頑張れる。かつて自分の中で完結していた世界が広がりました。そして、自分がいかに多くの人に助けられているかを知り、感謝することができるようになりました。

中学一年生の時、ある授業で、精神年齢のテストをやりました。その時、僕の結果は 21 歳でした。高校二年生になって、同じ先生の授業でもう一度同じテストをやりました。結果は、14 歳でした。中一から高2まで四年経って、精神年齢も 4 つ上がって 25 歳になるべきところを、実にマイナス 11 歳。「それはないだろ～」と言いたくなりました。

でも、それは自分にとって良い変化だったのだと思います。肩の荷を自分だけで背負うのではなく、信頼できる周囲の人と共有すること、共有していいんだということを学んだから、幼い精神年齢でいることを許される、幸せな時間を過ごせたのだと思います。

自分を信じる、周りの人を信じる。そんな気付きを与えてくれた逗子開成に六年間通うことができて、本当に幸せでした。そんな逗子開成での六年間を支えてくれたすべての方々に、心からの感謝の気持ちを伝えたく思います。忙しい日々の中で、様々な人からもらいつづけてきたたくさんの「特別なこと」を、当たり前だと思っていました。お弁当を作り続けてくれた母。時に厳しく、時に優しく道を正してくれた父。授業中寝落ちしてばかりの不真面目な僕にも寛大に接してくれた先生方。いつも笑顔をくれた友人たち。卒業する身になってようやく、多すぎて言い尽くせないほどの恩を、数えきれない人々から受け続けていたことに気づきました。いつも言えなかったけれど、本当に、ありがとうございました。

高校二年生の研究旅行でお世話になったバスガイドさんが、「高校の時の友達が、一番大切な一生の友達だ」と仰っていました。本当にその通りだと思います。逗子開成で得た、たくさんの素晴らしい出会いと気づき。結んだ絆。何ものにも代えがたい宝物です。この逗子開成という暖かな巣から飛び立つ僕たち卒業生の、一番のエネルギーです。

僕たちの羽は未完成で、頼りない翼です。それぞれの空に向けて羽ばたくなかで、つらいこと、苦しいことはきっと多々あるのでしょう。その時には、逗子開成で結んだ絆を互いに頼りにして、乗り越えてゆけると信じています。そしていつの日か、立派に成長して、逗子開成で受けた恩を返し、あるいは次の世代につないでいけるような、そんな大人になりましょう。

中高六年間を逗子開成で過ごせた幸せと、その幸せを支えてくださった全ての方々への深い感謝、そして、逗子開成卒業生の名に相応しい人物に大成するという誓いを以て、答辞とさせていただきます。

平成二十七年三月一日